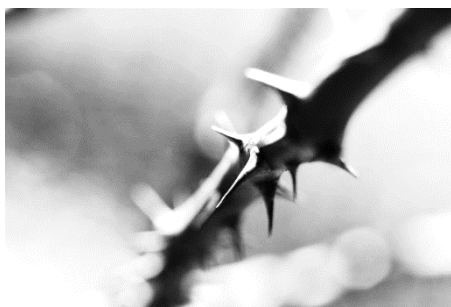


他愛もない話

A loveless story

薔薇の棘

S story



薔薇にはどうして棘があるのですか？

その問いかけに僕は確か、身を守る為です、と答えた。美しい花が、身を守るためのささやかな武器であると。それを聞いた少女が、複雑そうに微笑んだのを思い出す。彼女はぼつりと呟いた。

それは、本当に役に立つのでしょうか、と。

僕は見透かされたことに気づき、目を伏せ彼女に微笑みかける。少女は視線を光に送った。稼働中を示して淡く発光するアイソレーションタンクへ。

御伽話の、ガラスケースの薔薇を思う。

棘など、何の役にも立ちほしくない。そんな棘をお構い無しに、虫たちは薔薇を食い荒らす。摘み取りガラスで囲っても、一片一片花弁を落とし、やがて花は枯れていく。

意味はあるのか。棘に。ガラスに。

そんな話を、随分後になって僕は断片的に語った。

「薔薇の棘は、芽が伸び出した瞬間からついているんだ」
聞き終えての、界塚伊奈帆の第一声がそれだった。

面会室のチェスの合間の、他愛のない会話。花の話はどうしてだったか。確か、こいつが何か言ったはず。そう。サクラゼンセンとかいう聞きなれない言葉が始まりだった。

薔薇の話になったのは、火星に花はあるのかと彼が聞いたからだ。水と大気に乏しく、気温の変動が激しい火星では、植物が富と権力の証だから謁見の間に飾っている。しかし、花まで育てる余裕は無いのだ、と。そして僕は揚陸城に作った庭園を思い出した。

そこで、薔薇にはどうして棘があるのだろうか、と。僕は聞いてみた。そうしたら、界塚伊奈帆は逡巡の後、先の言葉を返したのだ。

盤面は休戦状態で、彼は棘の話が続ける。

「お花屋さんとか、危ないから棘を取ってしまうらしいけれど」

棘を抜かれ、店頭に並ぶ薔薇の花を想像する。

「棘を取ってしまうと、茎が折れやすくなるんだ」

根も葉も棘も失って、それでも買われなかった薔薇を思う。奪われ、捨てられ、枯れるだけ。

そういうことを、僕はしてきたんだ。

蛍光灯がチカチカする。臉の裏の静脈が蜘蛛の巣みたいに赤くなる。

目を開くと、待っていたように界塚伊奈帆が口を開く。

「そういうデザインなんだよ。自身を支えるためのものなんだ」

同じ問いでも、こんなに違う答えがあるのか。

しばらく、何も言えなかった。呼吸まで意識される静けさが煩い。熱の引いたチェスボードに視線を落とす。今日はお、これ以上進める気にはなれない。

手元に転がるポーンとルークを机に並べる。石の硬質な手触り。現実感が徐々に戻り、初期位置にある白のクイーンが目に残まる。戦略を考えてしまうのが嫌になって、両手の指を固く組む。

「……お前、薔薇の棘をどう思う？」

「僕？」

面食らったような、ほんの僅かに高い声。表情はあまり変わらない。思考を確認するように隻眼が斜め上を向いた。

うん、と彼は小さく頷く。

「綺麗だと思うけど」

「綺麗？」

意味がわからず問い返す。棘が、綺麗だって？

「マイナス 40 度では、薔薇の花弁は握ると粉々になるんだ。けれども、茎は残っている」

界塚はハンドジェスチャーを交えて話しはじめる。

「枯れる時もそうでしょ？ 花卉が全て散った後も、茎はそのまま伸びている」

枯れるまで、薔薇の花を見たことはない。僕の顔で分かったのか、界塚は話す速度を調整した。少しゆっくり。間を取っ

て。

「最後に残る姿が、茎であり棘なんだ。棘があるから折れた曲がつたりせず、そのままの形で枯れていく」

想像してみる。花瓶や、植木。垣根の群生、深い森の茂みの薔薇を。瑞々しい花の盛りを過ぎてなお、鋭い棘と硬い茎を晒すのを。

「綺麗じゃない？ それ」

そういう考え方もあるのか。

「花や香りは？」

納得はしたものの、腑に落ちないので聞いてみる。界塚はうーん、と小さく唸り自身の鼻先を指差した。

「僕、鼻がいいから。匂いは、ちょっと濃すぎるかな」

それに、と彼は肩を竦める。

「花は綺麗だけど、買ったたりするのは照れくさいよ」

今度はこちらが驚く番だ。花を買うのが恥ずかしい？ そんな感覚は知らなかった。

「そういうものかな」

何が可笑しいのか、界塚はくすりと声を漏らした。君にはわからないかも知れど、と独り言ちる。

「花を贈るなんて、ハードル高い。桜は、見に行けばいいでしょ？ 気楽だよ」

と言って彼は、サクラゼンセンの話を再開させる。

君のデザイン

I story



旋盤が好きだ。

第二次惑星間戦前の高校では、兵科教練の一環として、機械加工の実習があった。僕の通った芦原高校でも当然それはあって、僕はその授業が割と好きだった。操縦訓練が一番好きだったけれど、オイルの匂いと切削加工音の中、無言で作業している時は、整備士も悪くない、と思ったものだ。その時はまだ、再び戦争が起こり、学生が徴集され、その当事者となることを実感してはいなかったけれど。実感はしていても、可能性を知らなかったわけではない。予期はしていた。だから、僕は戦えた。生き残ることができたのは、幸運だったのだろう。

そう。旋盤が好きだった。

高回転するワーク。その表層が、バイトによって徐々に削られていく。その過程を見るのが好きだ。ほんの一瞬の力加減で、取り返しがつかなくなるその作業が。そうしてできた切削物の曲線にやすりをかけ、そして触れる。

ああ、綺麗だな、と思う。僕が美しいと感じるものの価値の重心は多分そこだ。

削がれ、削がれ。摩擦して、残ったラインの張り詰めた美しさ。究極だと感じる。人間のデザインとして。

だから驚く。感嘆する。全てを手放し、そして奪われる。自分をどんどん切り離し、擦り減らす。現在そして未来すら。そういう生き方をする人間がいることに。

病的で静止的な姿の中で、瞳の色がひどく際立つ。その目の見てきたものの中で、一つだけを手放すことなく閉じ込めている。

幸せに生きてほしい。自分がいない世界で、と。

そんな願いが持てるだろうか。僕は。

碧の双眸に映り込む僕の姿は一体どんな形だろうか。

「……何、見てる？」

声にふっと我に返る。ここは、高校の実習室ではない。僕は作業服ではなく、現在の階級が袖にあしらわれた軍服を着ている。

目の前に旋盤はない。二人で座るには大きすぎるテーブルと、その中央にはピースの欠けたチェスボード。そして向かいに、切削物という形容が相応しい青年がいる。痩せぎすの身体に、削げた頬は隈が濃い。眉間の皺。睨むような目遣い。その彼の、居心地の悪そうな表情にはっとする。何見てる、と言われて初めて、ぼうつと彼の細部を眺めていたことに気が付いた。

ギザギザになった短い爪。

ささくれのできた指の先。

影の濃い細い手首。

硬そうに出っ張る肘。

鎖骨周りの骨格と、無数の引き攀れの残る皮膚。

強く握れば折れるに違いない首筋。

目立つ頬骨。

青褪めた頬の隈。

削ぎ落とされて残ったもの。傷痕を含むその形。生きる、
ということを排除されたと見える身体。

「君のデザイン」

スレインが右の眉を上げた。怪訝な顔で伊奈帆を眺めて、
やがて小さく息を吐く。

「また、訳のわからないことを」

お互いに、会話の材料と組み立て方が違うのだ。それを踏
まえても、先ほどの返答はあまりに言葉が足りなさすぎたと思
い至る。

「説明しようか？」

「やめておく」

間髪入れずのノー。スレインはコン、と指先でテーブルを
叩いた。

「お前の話は長いから」

お互い様だ、と言いそうになるがやめておく。それが自身
の悪癖だという自覚はあるのだ。

「そう？　じゃあ手短にするから、どのくらいなら聞いてく
れる？」

スレインは片目を細め、口を歪ませ斜め上に視線を送った。
髪の際間に額の青い静脈が見える。

「一言」

「一言？」

ククッ、と彼の喉が鳴る。喉仏が上下して、右手のひらが
顔の横で翻る。蛍光灯が作る影が肌の色を白くする。

首がこくと横に傾き、口の横に窪みが生じ、影が落ちる。

「ワンフリーズ。それ以上は駄目だ」

ふっ、と笑った顔が消え入りそうに見えたので、伊奈帆は
浮かんだ言葉を忘れてしまった。

奥付

発行 Scramble/鳴海
発行日 2024.5.12/ZERO の方舟 16

Mail jjncg720@yahoo.co.jp
X (Twitter) @narumiblue
Pixiv ID 955950

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはお控えください。